分科会４

読み聞かせ講座 大きい子向け

たのしいおはなし会をもつために
～子ども読書活動交流集会（実技編）～

講師：大井　むつみ（東京家政大学）

◇大きい子向けの読み聞かせ講座では、詩、ナンセンス、わらべうた・ことばあそびについて、また読み聞かせを行う上での考え方について、実演を交えご講義いただきました。

詩やわらべうた、ナンセンスの読み聞かせを苦手とする人へ。作品を表現するのは、その作品が短ければ短いほどむずかしく、また力のある本でも読み手のたしかなスタンスと思いがないと伝わらない。だが、言葉の持つパワーこそ現代の子どもたちに必要なものである。さらに、笑いがこみあげてくる、まねをしたくなる、そんな言葉が今の子どもたちに不足しているのではないか。

この講座では、選びぬいた言葉で作られた絵本や詩、わらべうたを味わい、いきのいい言葉を楽しんでいただきたい。そして楽しかったという思いを持って帰っていただきたい。

絵本の読み聞かせを始めようとしている人に。

あなたは絵本と子ども、両方好きですか？

あなたは本の好きな大人ですか？

絵本と子ども、どちらにも愛情を持っていることは言うまでもない。また絵本や子どもの本以外にどんな本を読み、どんな言葉があなたの中に内包されているかを考えてほしい。量ではなく質が大切である。読み聞かせを届ける側にどれだけ言葉のもちあわせがあるか。短いテキストと動かぬ絵で表現される絵本だからこそ、これらのことはよみ手の資質として問われる。

ナンセンスは理屈抜きの楽しさがある。これを子どもに届けたい。子どもの日常は理屈抜きであり、理屈抜きに楽しいものは、生理的に気持ちのよいものである。生理的な気持ちよさとは、人間が根源的に求めているものである。

長新太は、知識優先の本の世界に、笑いもまた想像力を育む重要な要素であるとして殴り込みをかけた。理屈抜きのからっとした笑いは、子どもにも大人にも必要である。人は物語に感動を求めるが、感動とは涙を流すことだけではない。楽しさで心揺さぶられることもまた感動であり、特に子どもの時代には最優先されるべきことであると、再認識してほしい。

詩もまたすぱっと人の心に響いてくる。同じ題材の詩でも作る人によって様々な描かれ方をする。いろいろな感性を知ってほしい。短く短くしぼって、これでなければ、と選びぬかれた言葉とリズムは心地よいもの。心地よいという思いは生命力につながる。

子どもには「ことばグルメ」になってほしい。言葉は食べ物と同じ。どの子も言葉が大好きで、いくらでも言葉を食べてくれる。子どもは言葉を食べて自分の言葉の世界をつくっていく。おいしい言葉をたくさん食べてほしい。

おいしい、心地よい言葉を知ったら、自分でも口にするようになる。これが言葉を食べるということである。たくさんのおいしい言葉を食べることで、グルメになり、まずいも

のは口にしなくなる。自分で咀嚼して、飲み込んでいいか考えられるようにもなる。

だから、幼いうちから絵本にもっともっと親しんでもらいたい。栄養があるか、ではなくおいしいか。ためになるか、よりも楽しいかを大人は気にかけてほしい。

人間を人間たらしめるのは言葉である。せっかく人間に生まれたのに、言葉のもちあわせが少ないとどんなにつまらないかを考えてほしい。

我々の子ども時代は周囲にもっとたくさんのおいしい言葉があった。今は多様なメディアがあるが、食べさせたいと思うような言葉があまりでてこない。だからこそことばグルメになってほしい。たくさんの言葉をたべることが生きるためのエネルギーになる。

「子どもたちよ

子ども時代をしっかりとたのしんでください

おとなになってから

老人になってから

あなたを支えてくれるのは

子ども時代の「あなた」です」

※2001 年 10 月～2002 年 2 月に開催された「石井桃子展」（会場・杉並区立中央図書館）において石井桃子氏から寄せられた言葉です。（「石井桃子の拓いた世界」飯野真帆子／編（『こどもとしょかん』2002 年夏(94)号、東京子ども図書館刊）より）

子どもと本をもっと仲良くさせるにはどうしたらよいか。子どもと本の物理的距離を近くすることである。次の点を考えていただきたい。

・子どもたちだけで行かせられる場所に図書館があるか？

・そこは綺麗で明るいところか？子どもたちを歓迎してくれる専門の職員がいるか？

・無い場合にはそんな図書館を作ってくれるよう声をあげているか？

・学校図書館はどんな場所か？そこにはフルタイムで働く専門の職員がいるか？

・本よりも刺激的な楽しみをたくさん作って与えているのは誰か？

・まわりの大人がたまには夢中になって本を読んでいる姿を子どもに見せているか？

この６点は全て大人に責任がある。今の子どもは本を読まないのではなく、本を読みたいと思う環境におかれていないのではないか。

知らない人に会いたいとは思わないように、知らない本を読みたいとは思わない。いい本がいつでも、子どもの手の届くところに揃えてあるかを考えてほしい。読み聞かせはただ絵本を読むという行為だけではない。子どもをとりまく環境や子どもが今どういう時代に育っているかを考え、子どもに必要なものがないときは、なくては困ると声をあげることが必要である。それが絵本と子ども、どちらにも愛情を持っているということではないか。

◇スタッフのそよかぜ文庫によるわらべうた、ことばあそびの実演では、講座参加者も一緒に手あそびを行い楽しい実演となりました。またわらべうたと口の発達の関係についてもおはなしいただきました。

―わらべうたは心と体が健やかになる。うたいながら体のあちこちを全部さわる。赤ちゃんにとってこれほどよいことはない。口を動かしてたべること、しゃべること、これは健康にかかわっている。うたによって表情を変え頬を膨らませたりすることにより、鼻呼吸の確認ができ、あごの発達にもつながるなど先人の知恵がつまっている。ぜひ大人も子どもも楽しんでほしい。